みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Once We Were Communists : The Bula Tale Cooperative Group Experiment and its Aftermath in Fiji

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005877

我々の「共産党宣言」

——フィジーにおける一協同組合集団ブラ・タレの実験と顚末——

丹　羽　典　生

目　次

1　序説
1－1　はじめに
1－2　フィジーと協同組合運動
——開発と伝統という問題
1－3　ブラ・タレの実践
——ラディカルな生活改善運動
2　「共産党宣言」をめぐる混乱
2－1　ブラ・タレの誕生
2－2　「共産党宣言」
2－3　ブラ・タレの反発
2－4　ブラ・タレ側の対応
3　ブラ・タレの分裂
3－1　ブラ・タレからラミへ
3－2　ラマタウのその後
——ブラ・タレから西部民主党の結成へ
4　ラミの追放
4－1　地域社会での軋轢
5　最後に
——生活改善の困難そして恐怖としての共産党

1　序　　説

1－1　はじめに

本稿の目的は，南太平洋に位置するフィジー諸島共和国における，協同組合運動の実践を検討することにある。事例として，フィジー西部，ヴィティレヴ島南西部に位置するナンロガ・ナヴォサ（Nadroga/Navosa）地方で，1961年から活動を繰り広げていた協同組合集団ブラ・タレ（Bula Tale）に着目する。

フィジー諸島は，ヴィティレヴ島を東西に分断する形で言語や土着の政治体系の点に置いて差異が存在している。東部では早くから社会組織の階層性を発達させており，同地方の首長層はイギリスの植民地政策とうまく歩調を合わせることができた。ことに1874年大英帝国の植民地化以降，東部の「伝統的」政治制度が，間接統治におけるフィジー人の「伝統的」あり方として参照される傾向が強く，階層性の発達していなかった西側のフィジー社会は反対に制度上不利な立場におかれることとなった［Durutalo 1985］。また，フィジー人に対して「伝統的」生活に縛り付ける保護主義的な政策を施行した一方，植民地政府は，植民地フィジーの経済基盤を安定化させる必要性から，1879年から1916年にかけて，インド人をサトウキビプランテーショ

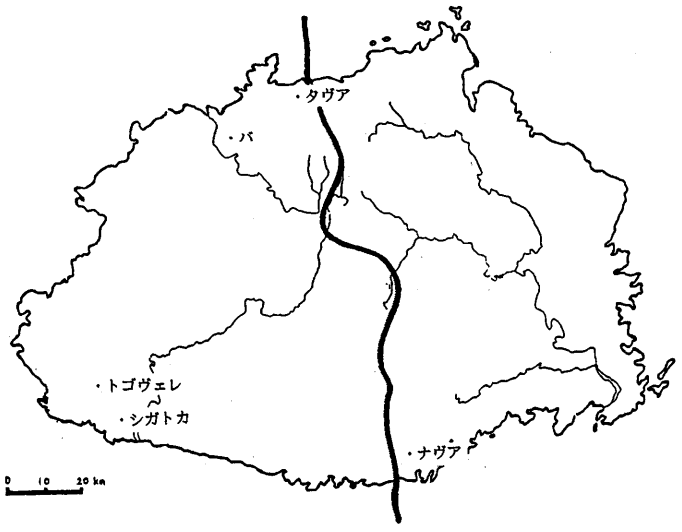

図 フィジー，ビティレヴ島――言語上の東西の分断線――
(Freeman [1986：10] より作成)

ンにおける契約労働者として導入していった。

本稿で取り扱う1960年代の時点においても，フィジー人は依然としてこうした制度的枠内におかれていた。むしろ，東部フィジーの大首長の家系に連なるフィジー人ラトゥ・スクナ (Ratu Sukuna) の指導のもと，1940年代半ばから間接統治体制の改変，ことにフィジー人を管轄するフィジー人行政部 (Fijian Administration) を改良してフィジー人担当局 (Fijian Affairs Board) を設置し，フィジー人の高位首長で構成される大首長会議の権益拡大を施すなど，「伝統」によって束縛するという方向性は強化されたといえる。その結果，フィジー人を経済開発の波に直接さらすべきではないという政策は継続した。一方，インド人はサトウキビ産業の成長，成熟の恩恵を被り，1960年代にはフィジーにおける経済的足場を次第に固めていった。

ブラ・タレとは，東部寄りの植民地行政のなか，インド人などに比してフィジー人の経済的遅れが一般的に認識されだした1960年代という時代に，西部フィジーの人々が展開した協同組合運動であるといえる。ブラ・タレは，みずからの伝統を改変するといういわば生活改善運動を実践しており，一時期こうした特異な活動を「共産主義 (Komiunisi)」として規定したという興味深い歴史を有している。しかるにこの運動を取り扱った先行研究は，驚くほど少ない。1970年にメソディスト派の牧師ナイヴォラシガ [Naivolasiga 1970] が，ブラ・タレの生活に関する簡潔な調査報告を残している他は，デュルタロ [Durutalo 1985] やトーマス [Thomas 1997] が多少触れているのみである。フィジーの歴史を包括的に取り扱ったラル [Lal 1992] の著作のなかでも挿話的に言及されるのみで，十全な検討の対象になったことはない。(1)

そのため，本稿ではブラ・タレの活動初期，ブラ・タレという特異な協同組合集団の実験的実践が当時のフィジー社会にどのように受け入れられたのかを記述，検討していくことから始

めたい。はじめに，ブラ・タレの生まれる背景としてあったフィジーへの協同組合運動の導入過程に触れた後に，ブラ・タレの「共産党宣言」が周辺社会にどのように受けとめられたのかを本稿の中心的課題として記述していく。そのうえでブラ・タレが周辺社会との衝突を経て組織分裂を起こし，さらには出身村落から追放されるに至った歴史的過程について追跡していきたい。そして最後にブラ・タレがたどった顚末と実践からみえてくる，当時のフィジーがおかれていた時代的，地政学的制約について指摘する。

1－2　フィジーと協同組合運動——開発と伝統という問題

フィジーに組合運動が具体的に導入されだしたのは，協同組合に関する法が制定された1947年以降のことであった。協同組合活動を通じて開発されるべき対象として認知されたのは，他の民族集団に比して特に経済発展の遅れが明白となりつつあったフィジー人であった。

協同組合方式が植民地政府側に着目された最大の理由は，組合というものがフィジー人社会の特徴と同じく「共同性（communal）」を軸に組織されているので，組合という回路を通じてであれば，上から発展のあり方を押しつけることなく経済成長を果たしていけることが期待されたからであった。いわばこうした土着的なるものを生かした，伝統を通じた発展と要約し得る考え方が，社会の各層からの幅広い支持を獲得できた理由の一つであろう。ブライアン・フリーストン（Brian Freeston）総督は，1948年フィジー人の高位首長で構成される大首長会議の場で協同組合について太鼓判を押した。フィジー人は「本能的に協同する個人」であり，協同組合とは「フィジー人の共同的行動様式（Fijian communal method of doing things）の現代的適応であるとさえ言い得るものではなかろうか」[Council Paper 1949 no. 14: 14] と賞賛した。農業官ハーヴェイ（Harvey）も同年に，「適切な指導と助力を授ければ，それ（協同組合のこと）は，フィジー人の社会的，経済的構造とうまく嚙み合うことが可能であろう」[ibid.] と述べていた。

重要なことは，協同組合の組織形態にフィジー人の伝統的な共同的労働のあり方との類似点を看取するこうした発想が，何も西洋植民地主義的思いこみだけでもなかったという点である。1950年代のフィジー人を代表した政治家ラトゥ・スクナも協同組合の導入に肯定的であったし［Spate 1959: 55-59］，農村で生活しているような平民層のフィジー人にも，協同組合運動が熱狂的に迎え入れられていった様をうかがうことができる［Council Paper 1950 no. 22: 2］。

しかし，フィジー東部島嶼部に位置するラウ（Lau）などといったコプラ生産域の一部を除けば，協同組合の多くは順調な発展をとげていかなかった［Knapman 1975: 4-22］。共同的な生活のあり方は，個人のイニシアティブを押さえつける要因ともなったし，責任の所在を曖昧にし組合経営の散漫化へとつながつものであると，政府の期待を裏切る結果となった［Council Paper 1950 no. 22］。

このため，1960年代前後からフィジー社会の資本主義社会への参入という問題は，別の角度

からも検討されていく。たとえば，スペイト報告［Spate 1959］，バーンズ報告［Burns 1963］の両報告書は，ともに従来の共同的な制度を通じた発展の方向性から距離をおき，フィジー人独自の伝統的束縛を緩和し，個人主義的企業家を支援，育成していくことを唱道した。以降，60年代，70年代に発表されたフィジーの開発をめぐる研究もほぼ同じ論旨を別の視点から繰り返している［cf. Nayacakalou 1978, Belshaw 1964, Watters 1969］。

1－3 ブラ・タレの実践――ラディカルな生活改善運動

本稿で扱うブラ・タレは，前節で述べた植民地政府による協同組合運動の推進過程のもとで，みずからの生活改善のために伝統的な慣習の負荷を軽減することを試みた協同組合集団である。その意味で，むしろ上記両報告書に記載された処方箋をある程度自主的に実践しようとした集団であったといえる。ブラ・タレとは再生，生まれ変わりを意味するフィジー語で，人口の大多数をキリスト教徒が占めるフィジー人には「イエスの復活」をも強く喚起させる言葉である。

ブラ・タレの人々は1961年からアピメレキ・ラマタウ・マタカ（Apimeleki Ramatau Mataka）[2]を指導者として，フィジー人の再生をめざしたラディカルで農本主義的な生活改変を実践した。具体的にはフィジーの伝統とされる諸儀礼を廃止または簡略化した。たとえば，これまでのように長期にわたりかつ多大な金銭を要する婚姻，葬儀のプロセスは大幅に簡素化された。フィジーではそれなしでは多くの儀礼が進行さえままならない伝統的な交換材であるタンブア（tabua）[3]を棄却し，フィジー文化の要であるカヴァ（kava）[4]の飲用も禁じられた。

厳格な労働倫理が求められ，ブラ・タレの活動していた時期にはすでに「フィジー的伝統」の一部としてフィジー人のあいだで受け入れられていたキリスト教的実践に反して，日曜日に働くことも厭わず，人々は日常生活をタイムテーブルで定められた労働サイクルに従っていた。日常生活においても酒，タバコといった嗜好品を用いることが禁止された。また，共同性が推奨され，人々は労働の際にも一緒になって働くことがすすめられたし，衣服が共有されるなど特定の私有財産は禁止された。さらにブラ・タレに所属する子供を通常の学校へ送らず，コミュニティ内で教育を行っていた。こうした生活様式は農村部で生活する平均的なフィジー人の想像の枠を越えた，彼らにすれば，「ブラ・タレの奴らはフィジー人ではない」という類のものである。[5]

ブラ・タレの実践した伝統生活の組み替えは，「伝統」的束縛を緩和するという意味でスペイト，バーンズ両報告書の推奨する路線に従っているようにみえつつもそれを逸脱したものであった。興味深いことに，両報告書と異なりブラ・タレは，伝統の改変を一義的に個人主義の導入へとつなげることなく，いわば伝統的共同性とは異質の共同性を生み出すような活動であった。さらに，ブラ・タレはみずからのこうした実践を「共産主義」とみなした点も，この組合のその後の展開にとって見逃すことのできない影響をもった。

2 「共産党宣言」をめぐる混乱

2－1 ブラ・タレの誕生

さて，ブラ・タレは，先行したタンヴァニヴォノ協同組合（Tabanivono Co-operative）などがその活動を終えたのと入れ替わりに活動を始めていた[6] [Naivolasiga 1970]。ブラ・タレという名称で正式に活動を開始したのは1961年1月10日のことで，ヴィティレヴ島南西部ナンロガ・ナヴォサ地方のトゴヴェレ（Togovere），カンビシ（Kabisi），エムリ（Emuri），ヴァガンラ（Vagadra）の4村を中心としていた。

先節で触れた特異な生活改変のあり方は人々の耳目を引くものであったらしく，組織の結成後，さっそくメディアに紹介された。フィジー語で発行されていた地元紙『ヴァカレレワ・ニ・パシフィカ（*Vakalelewa ni Pasifika*）』1961年7月13日付けにブラ・タレは取り上げられている。全国紙の『フィジー・タイムズ』にほぼ同内容の記事が掲載されたのは8月12日，ブラ・タレ協会（Bula Tale Association）という名の協同組合運動という扱いであった。

植民地政府側の関心も引いたらしく，フィジー人担当局からコメントが出された。フィジー人担当局とは植民地フィジーの分割統治体制においてフィジー人を管轄すべく1944年に設立された行政機関であった。この機関は，政治家ラトゥ・スクナの指導のもとフィジー人によるフィジーの政治を行うという意味で実質的な間接統治体制を完成させた制度であるといえる[Scarr 1980; Lal 1992: 137-138]。時の同局副長官ラトゥ・カミセセ・マラ（Ratu Kamisese Mara）は，後にフィジーの首相，大統領の座を歴任してフィジー近代を導いていく政治家で，フィジー東部ラウ諸島出身の大首長でもあった。1958年に逝去したラトゥ・スクナの跡目を継ぐフィジー人を代表する人物としての認知を，彼は受け始めていた。

この時点での政府見解とメディアでの報道は，後の騒動を考えあわせるとブラ・タレに対して意外なほど宥和的でいたずらなセンセーショナリズムを廃したものであった。自身ブラ・タレの指導者であるアピメレキ・ラマタウと直接の面談を済ませ，ブラ・タレについての基礎的な情報を入手していたフィジー人担当局副長官ラトゥ・マラにとって，彼らの活動内容で特に問題とすべきことはなかったと思われる。そもそもブラ・タレを監督する役割にあたる，ナンロガ・ナヴォサの代理ロコ・トゥイ・ナンロガ（Roko Tui Nadroga）[7]も，事前にアピメレキ・ラマタウと何度か面会をしており，またブラ・タレ側とも連絡を取りあっていたのである[FT 8/15/1961]。

そのうえでラトゥ・マラは，ラマタウが残していったブラ・タレ定款を検討し，植民地の規則に抵触しかねない法律上の諸点について，修正すべき箇所を助言した。そして，ラマタウに，協同組合関連の規則を研究すると同時に協同組合の登録吏と相談するよう強く助言した。なぜなら，すでに政府側で用意されていた協同組合という枠組みを用いた方が，ブラ・タレ側が自

主的に考案した定款よりも，発展へのいっそうすぐれた足がかりをブラ・タレに提供し得ると彼には思えたからであった。そしてブラ・タレの目的は，いわば経済開発にあるのだから，ブラ・タレを頭ごなしに押さえつけようとするのではなく，現行の法に従って活動を進めるよう指導に努めるべきであると地方長官の側へも助言した [ibid.]。少なくともブラ・タレ定款に目を通して，ラマタウとも面会していた副長官ラトゥ・マラにブラ・タレに対する警戒心がみられなかった点は注目に値する。つまりブラ・タレはあらたな生活様式を希求して独自の特殊な規則に従う集団であったとしても，その活動を禁止させる必要があるほどの存在と政府側に認知されていなかったのである。ラマタウ自身も，この時点ではブラ・タレを共産主義集団と明確に規定することはなかった。

2－2 「共産党宣言」

しかし，1961年8月24日，ブラ・タレ集団の運命を180度転換させる事件が起こる。ラマタウはみずからの協同組合活動の内容を「共産主義」として積極的に規定し出したのである。そして，ラマタウはフィジー・タイムズにおもむき，協同組合の名称をブラ・タレ協会からブラ・タレ共産党 (Bula Tale Communist Party) へと変更し，みずからの集団を共産党であると宣言した。

ブラ・タレ共産党は，「理念及び実践において共産主義的」で植民地政府，フィジー人行政部につぐ「第三の政府」であると主張し，「もし皆の生活をよくするのが共産主義であるのなら，何がいけない」と断言した [FT 8/25/1961]。この「共産党宣言」は，全国紙である『フィジー・タイムズ』で発表された。

発表後，この「共産党宣言」を支持する人々があらわれた。たとえば，フィジー在住のインド人プリタム・シン (Pritam Singh) は，フィジーの歴史上おそらくはじめて，フィジー人のなかから生活水準向上をめざす試みが出現したと，ブラ・タレに感嘆の意を表した。そして，彼らに対する助力を惜しまないと述べた [ibid.]。

フィジー人のなかにも同調者が出現した。たとえばヴァヌアレヴ (Vanualevu) 島ザカウンロベ (Cakaudrove) 地方の組合主催者であるエセカイア・ボラボラ (Esekaia Bolabola) は，ブラ・タレ共産党への完全なる支持を表明した。彼によると，1874年大英帝国にフィジーが割譲されてからフィジー人は，「現行の時代遅れで無秩序なフィジー人行政部の被害」[ibid.] にさらされてきた。現在フィジー人は，こうした状況からの変化を何より必要としているので「もし共産主義が我々の面している問題への解答であるならば，ぜひ，実現させてみよう」[ibid.] と率直に語った。フィジー東部ラウ地方のライテイア・サイニ (Laitia Saini) も，ブラ・タレの指導者を讃え，「アピメレキのしていることが『共産主義』あるいは何らかの『主義』であったとして，何がいけないのだ」[ibid.] と断じた。

以上の言説から，ブラ・タレの活動が，フィジーでの生活改善の試みとして，民族を問わず

少なくとも一部の層から共感をもって受け入れられたことがわかる。また，アピメレキ・ラマタウの共産主義というテーゼが，必ずしもイデオロギーへの共感ではなく現状のリーダーたちの実行力欠如や非効率さに対する批判として，一定の見解と支持をえたことがうかがえる。

2－3　ブラ・タレへの反発

しかし共産主義という言葉は，冷戦下の国際政治の力学下におかれた当時のフィジーにおいて，多大なる反発を生み出していった。おそらく私有財産の共有化といったブラ・タレの実践や理念の一部に着目して，ラマタウは共産主義という言葉をひねり出したのであろう。ともあれ，この言葉がいったんメディアに登場するやいなやラマタウがこの言葉に込めていたであろう共同での生活改善というニュアンスや思いはそぎ落とされ，共産主義というレッテルだけが一人歩きを始めたのである。結果として「共産党宣言」は各界に多大な波紋を広げていくことになった。

たとえば，フィジー人協会 (Fijian Association) 執行部は，フィジー連合と「フィジー人及びロトゥマ人固定資産税納付者協会 (Fijian and Rotuman Ratepayers' Association)」の連名で声明を出した。フィジー人協会とは1956年に結成された会で，1970年の独立以降およそ20年にわたりフィジーの政治を牽引していくことになる同盟党の前身にあたる。フィジー東部の大首長の家系に属するラトゥ・エドワード・ザコンバウ (Ratu Edward Cakobau) を総裁にいただき，フィジー人中心で構成された同組織はいわば，名実ともにフィジーの保守本流であった。

彼らの声明によると，「アピメレキ・ラマタウ・マタカは貴紙のコラムを通じてナンロガ地方の4村落が，彼の指導のもと『共産主義者』になったと主張している。本協会は，留保することなく，フィジー人の一般的な見方にそわない方向へすすんでいくことを非難する」。また，我々協会は「過去における同様な数多くの運動についても知っており，コミュニティにおいて非道徳的な影響力を及ぼす人が，無知な人を搾取することもしばしあった」[FT 8/26/1961] と手厳しく批判した。

フィジー人教職員協会 (Fijian Teachers Association) の総裁，サキアシ・ソヴァニヴァル (Sakiasi Sovanivalu) は，アピメレキによって表明された共産主義への希求がごく一部のフィジー人の要求にすぎないと断じた。そのうえで「こうしたフィジー人は共産主義的な生活について行き届いた理解をしている訳ではない」し，「協同組合は共産主義とみなされたり，混同されたりするべきではない。共産主義とは我々自由を愛する人民には相容れない」[ibid.] とコメントした。

追い打ちをかけるように『フィジー・タイムズ』も「別の道に目を向けよ！」と題された社説でブラ・タレに無関心な態度を示すべきでなく，危険な方向へ突き進む前に何らかの対策を講じるべきであると示唆した [FT 8/28/1961]。

反共産主義的なこうした言辞は，当時の一般人にも存在していたと思われる。たとえば，ス

ヴァ在住のフィジー人は，わたしたちはみなこの組合に嫌悪を感じており，こうしたフィジー人に前例のない運動は，「わたしたちの名前を汚すことになる」と述べていた［VP 8/31/1961］。

さらに，フィジー国内における西部の小村の問題ではないとばかりに，太平洋地域一般の情報提供雑誌として評価が高い『月刊太平洋諸島（Pacific Islands Monthly）』までもが，ラマタウの活動をフィジーにおける共産主義集団の登場として写真入りで紹介した［PIM September 1961］。これに反応したのかニュージーランドの議会では，無視できない国際問題でもあるかのように，「太平洋には赤がいる」との発言がされるに至った［PIM October 1961］。

加熱し続ける報道のなかで，フィジー政府の報道官は例外的に冷静な対応をしていた。新しいのは共産党と宣言したことだけで，ブラ・タレの活動内容自体はさほど目新しくはないとコメントしたのである。そして，上節で述べたラトゥ・マラの見解を支持し，ブラ・タレ共産党の無害さを繰り返した［FT 8/26/1961］。

2－4　ブラ・タレ側の対応

こうした各界の過剰な反応に衝撃を受けたのはむしろブラ・タレ自身の方であったと思われる。ラマタウはさっそく前言を撤回あるいは修正するコメントを出した。彼にとって共産主義の定義とは「共同体に財産が帰属しており，メンバーは，各自の能力に応じて働き，各自の欲求に応じて受け取る」［FT 9/2/1961］といった「ゴーダ綱領評註」の一節を思わせるが，素朴なものにすぎなかった。(8)

また，ブラ・タレ共産党の目的は，「私有財産という外来の教義からフィジーを伝統的な共同的所有へと戻す」［ibid.］ことを意味した伝統主義的とも呼びうるものであり，共産主義という標語はかかる事態を表現しかつ人々を驚かせるために便宜上使用したにすぎないと，ラマタウは主張した。そして，当然のことながら海外で活動している共産主義や国際的な政治運動とは何ら関係がなく，すでにナンロガの村落で実践されている原理をフィジー各地に広げたいだけであった，と述べている［ibid.］。

ラマタウによれば，ブラ・タレの活動には宗教行為を否定するようなことはまったくない。ラマタウ自身キリスト教を信仰しているし，私有財産の否認に関していえば，初期キリスト教ではどのような私有財産をも承認しなかったはずであるというのが彼の言い分である。すなわちフィジー人に共産主義者はいないし，ブラ・タレが行っているのは「協同組合的企業」にすぎないというのである［ibid.］。この発言が各界からの批判を交わす口実にすぎないのか，あるいはラマタウの本心であったのかは，判断が分かれる点であろう。

むしろここで指摘しておく必要があるのは，ブラ・タレ協同組合会員すべてが，ラマタウの「共産党宣言」に賛意を表している訳ではなかった点である。1961年8月に，合計8人にも及ぶブラ・タレのメンバーの連名で出された「ブラ・タレの声」と題された短い文章で，ブラ・タレが結成されるに至る歴史的展開をスケッチした後，同運動の目的を彼ら自身の言葉で語っ

ている。ここには，ラマタウの言説にみられたような共産主義の影はまったくみあたらない。フィジー人が，現実社会の変化にうまく適応していないのはなぜかと真摯に現実の困難に向き合い，「死んだ状態から再度立ち上がり，あらたな世界へ向けて自由のため走る」[VP 8/31/1961]のだと決意表明している。「古い世界の重荷から人間を解き放つことが目的だ。金銭や物品が必要とされているのではない。魂だけだ。思いやりということにおいて我々は一つになれるのだ」[9] [ibid.] とブラ・タレ集団のあり方，思想を述べている。

こうしたブラ・タレのメンバーの発言を踏まえたうえで，「共産党宣言」をめぐる騒動を見直してみると，ラマタウの発言に不注意な部分があったことはさておき，やはりメディアでふくらまされたという印象を，我々はぬぐい去ることはできない。ブラ・タレの活動内容だけに目を凝らしてみれば，彼らの生活規則自体が特殊であったことには違いないが，フィジーの歴史において前例がなかった訳ではない。たとえばフィジー東部に位置するタイレヴではすでにダク (Daku) という運動が先駆けて行われていたし，他に幾例も存在している[10]。

また，メディアのなかでラマタウのムハンマド・トラとの交友が意味ありげに取り沙汰されたことなども，ブラ・タレに悪い印象を与える効果があった。当時ムハンマド・トラは暴力革命を信奉する労働組合員として知られ，1959年に彼が参加したスヴァでの石油関連の組合 (Wholesale and Retail General Workers' Union) による暴動ストライキの記憶はまだ人々に生々しく残っていた。この暴動では分割統治的の原則を破りフィジー人のムハンマド・トラとインド人のジェイムズ・アンソニー (James Anthony) の両者が，民族の垣根を越えて協力したことが，植民地政府側には衝撃をもって迎えられた事件であった。また，ムハンマド・トラはフィジー人では希有なイスラームへの改宗者で，こうした彼の宗教的立場は先に触れた経歴に加えて，ブラ・タレに対する世間の不安を助長させた [Lal 1992: 165-169; Council Paper 1960 no. 10]。

3　ブラ・タレの分裂

3－1　ブラ・タレからラミへ

しかしラマタウの応答にもかかわらず，一度煽られたブラ・タレに対する恐怖心，猜疑心は容易にしずめることができなかった。ブラ・タレ協同組合は，「共産党宣言」以降外部社会からの様々な圧力にさらされていくことになる。

まず，1961年9月6日水曜日，ナンロガ・ナヴォサ地方を管轄する役人からの訪問，監査を受けた。彼らはブラ・タレが設立され，活動の中心地であった4村落を巡回，視察した[11]。視察のメンバーは，ヨーロッパ人2名，フィジー人2名の4人からなった[12] [FT 9/8/1961]。そもそもブラ・タレがナンロガ・ナヴォサ地方で市場を開いた際には，このナンロガ・ナヴォサのロコ[13]はもちろん，同地方の大首長カ・レヴ (Ka Levu) の係累が参列していたとされ [VP 8/31/1961],

この来訪もブラ・タレの活動の実状を視察することを目的としたおだやかな来訪であったと思われる。

さらに，9月中旬に，ブラ・タレのリーダー，ラマタウがナンディ空港において侵入，放浪の廉で逮捕された［FT 9/19/1961］。ラマタウはナンディ空港で働いていた友人と会うために空港に出向いていただけであり，まわりの「共産主義者」に対する警戒心，過剰なまでの反応ぶりをうかがうことができる。

また，みずからの子供たちを学校へ送らないというブラ・タレの規則も躓きの石となった。1961年11月ブラ・ラレは，メンバーの子供を学校に送らなかったことから端を発して，区立セモ学校（Semo District School）の教員と対立した。1961年9月25日あたりから，総計43名にのぼるブラ・タレの子供たちは学校に出席しなくなっていた。不登校の理由についてラマタウは，金銭的理由から子供たちを学校へ出席させることができなくなったとの弁明をしていた［FT 11/18/1961］。

この対立から学校とブラ・タレは法廷の場で争うこととなった。ところが起訴されたブラ・タレのメンバー全員が，召喚状通りに出頭しなかったため逮捕された。ラマタウ以下17名に及ぶブラ・タレのメンバーは，ラマタウはスヴァでの，他の者はラウトカ（Lautoka）での拘留を経て，1週間後に開かれた裁判の結果，全員にフィジー人規則（Fijian Regulations）のもと刑が課された。ラマタウは5ポンドの罰金あるいは1月の刑務所生活，他の者には2ポンド10セントの罰金あるいは2週間の刑務所生活が言い渡された［FT 11/18/1961］。

このようにブラ・タレをめぐる混乱が加速度的に加熱し続けるなか，ブラ・タレは1962年6月に突如，組織名をラミ（Lami）と変更し，指導者もアピメレキ・ラマタウからエモシ・ソヴェ（Emosi Sove）へと引き継がれた［VP 6/7/1962］。ラミとはヒツジを意味する英語のラムがフィジー語化されたもので，フィジー人にとって「イエス」を象徴するとされている。ここでは「ラミのようなロロマ」つまり，ヒツジのような慈愛という意味が込められている[14]。そしてエモシたちにとってブラ・タレの中心理念であった「ロロマ（*loloma*）」に従った活動へと立ち返るべく動き出した。現ラミの信奉者のなかにも，自らの協同組合の別名を「愛の会（*Soqosoqo ni Loloma*）」であると話す人も少なくない。

指導者が変更された理由は，まず，次節で触れるようなラマタウの政治活動への転身が考えられる。ついで，こうしたラマタウの活動と一定の距離をおき，ロロマを中心として労働を通じた生活改善というかねての方向性を引き続き模索していきたいという人々とのあいだの分岐がいよいよ明白になってきたということがある。後者の人々はメディア，口コミを通じて肥大した共産党という負のイメージを忌避し，それを払拭するために組織名，及び指導者の変更を行ったと思われるのである。

3－2　ラマタウのその後――ブラ・タレから西部民主党の結成へ

さて本節では，ラミとしてのその後の活動をみていく前に「共産党宣言」の宣言者張本人であるラマタウのその後の足取りをたどっておきたい。先に述べたようにブラ・タレはラミへと組織改変を経た後，ラミの運営から一歩退いたラマタウは，これまでの村落を基盤としたラディカルな生活改善運動の指導者という立場に飽きたらず，より積極的に政治活動へと足場を広げていった。

ラマタウは，1963年のフィジーにおける選挙を控えて党を結成し始めた。「共産党宣言」から1年経った1962年8月ラウトカにて，フィジー西部地方の地域的アイデンティティを前面に押し出した会合が開かれた。この参加者のなかに，アピメレキ・ラマタウもいたのである。他にはムハンマド・トラ，ラトゥ・モセセ・トゥイサワウ，副ロコ（Roko veivuke）のチェレマイア・トゥワイ（Jeremaia Tuwai）など名だたるメンバーが見受けられた。そして，この場で，セルア（Serua）地方からラ（Ra）地方に至る，西部フィジー人のためのあらたな組織の設立が目標とされた［VP 8/23/1962］。

党の形として具体化するのは1962年9月22日土曜日，党名はフィジー西部地方への思いを込めて西部民主党（Western Democratic Party）と正式に命名された。党首はフィジー西部バ（Ba）地方に位置するヴァンラヴァンラ（Vadravadra）村出身のマレリリリ・ラインベ（Malelilili Raibe）[15]など，その名にふさわしく構成員はフィジーの西側地域から幅広く集められていた。後日開かれた役員選出会議では，激論の末，総裁にマレリリリ・ラインベ，そして副総裁にペナイア・ロコヴニ（Penaia Rokovuni）が就任することが決められた。ラマタウも副総裁の一人として，会計のムハンマド・トラとともに役員の一人に任じられた［VP 10/11/1962］。

この時点ではラマタウはもはや共産主義という修辞を用いることをせずに，むしろ西部フィジー人としてのアイデンティティを党の目的の前面に打ちだしていた。ブラ・タレの指導者時代には公表をはばかっていたトラとの関係もここでは公のものとされた。

ラマタウの西部民主党は順調に支持基盤を広げる会合を重ね，1962年11月3日土曜日タヴア（Tavua）にて開かれた会合ではタヴアの大首長を含む，500人以上の聴衆を集めるまでに成長した［VP 11/8/1962］。しかし1963年選挙において，結局，西部民主党は敗北を喫し，解散された。対立候補は，植民地行政に確たる位置を占め，さらにはフィジー東部の大首長でもあったラトゥ・ペナイアで，彼には歯が立たなかった［Meller and Anthony 1968; Lal 1992: 186-193］。

この時期以降，ラマタウの足取りはつかみがたい。ラマタウの近親者の話によれば，バ地方でラミの人たちと合流していた時期もあったが，しばらくすると自分の土地を人に貸し出して手に入れた資金を元手にニュージーランドへ渡航し，最終的にはオーストラリアで市民権を得て，そこで生活を送っていた。ラマタウの晩年は必ずしも恵まれていなかったようである。ブラ・タレでうち立てた原理に変わらぬ信念をもちながらも，病魔に健康をむしばまれ，彼の子

供3人をフィジーから呼び寄せ身辺の世話をさせていた晩年であった。

4 ラミの追放

4－1 地域社会での軋轢

さて，ラマタウは西部民主党の活動に忙殺されていくなか，ブラ・タレの人々も近隣社会との対応に追われていた。第三章で述べたようにラミと組織名を変更しイメージ転換をはかったブラ・タレであったが，周辺地域社会との関係改善の兆しはみられなかった。端的に彼らの特異な活動及び理念が，受け入れられて行くことは困難であったのである。

ラミの人たちは，さらにソリ・ニ・ヤサナ（*soli ni yasana*）と呼ばれる税金の未払い問題をめぐって政府との衝突にまきこまれることとなった。当時フィジー人は各人の出身地方（*yasana*）ごとに割り振られたソリ・ニ・ヤサナとよばれる税金の一種を支払う義務があった［Roth 1973: 150-163］。この時点ではラミと改名していたブラ・タレは，このソリ・ニ・ヤサナを支払う義務を怠っていたのであった。

税金滞納を口実として，これまでの感情的なしこりもあったのであろう，地区議会（Tikina Council）は，ラミの人々にトゴヴェレ村からの立ち退き決議を下した。1962年8月24日にはトゴヴェレへとブリ・ズヴ（Buli Cuvu）と警察が，昨年度の巡行に続き，視察のため派遣された。トゴヴェレから海へ向かって徒歩1時間ほどの距離にあるヴォウアという町に駐在していた彼らは，1962年8月22日に開かれたこの地区議会（Tikina Council）の決議を受け，ラミに対して1週間以内の立ち退きを勧告した［VP 9/13/1962］。

しかし，この勧告はたんなる通知にとどまらなかった。この視察には近隣村落のヴォウアの人々も随行していたようで，彼らがラミの人々を手ひどく扱ったのであった。トゴヴェレ村が位置する土地はヴォウアの所有地に当たり，ヴォウアの人々は地主としてこの自己の所有地にて生活していた彼らにとっての「奇妙な集団」に対処したと思われる。

ラミのリーダー，エモシは感情もあらわに，彼の視点から見た事件の有様を書き記している。「（警察たちは）村の掟を破り，家々に入り込み，そのうえ屋内の家具を放り投げた。いくつかの家具は破損し，いくつかは失われた。近辺にいた男の人をつかまえ，すでに放棄してあった品々の上へと強く放り出した。彼らは殴られ，道まで押し出された」［VP 9/6/1962］。さらに部屋に入り込んだ若者のなかには，そこにいた女性を目にして「こいつは俺のものだ，俺の女にしてやる」［ibid.］と狼藉をはたらいたと言うのだ。

さらにヴォウアの村人に襲撃事件もさめやらぬうちに，ブラ・タレの人々はセモ村の人々からの襲撃を受けた。著者がトゴヴェレやセモの村人から話を聞いたところ，トゴヴェレ村が管理していた牛を縛る縄が切れて，近隣に位置したセモの村の畑を荒らしたことが原因であると語る者もいるが，正確なことは現在では分からない。今回の襲撃では，前回以上の肉体的暴力

がふるわれたとされる。元ラミのメンバーである老人は,「このときの襲撃で前歯がすべてなくなった」と,すべて抜け落ちた前歯の跡をみせてくれた。ブラ・タレ時代の活動に積極的に関わっていた別の老人は「フィジーが武器を所持できる国だったら我々は民族虐殺 (genocide) されていた」とその際の経験を語る。女性に対して暴力が振るわれた形跡はない。しかし,トゴヴェレの村人,現及び元ラミのメンバーは,誰もが口を揃えて村中が流血で覆われた様を,真に迫って説明する。一方で,セモの老人には,我々こそが馬にまたがり共産主義者を征伐したと,いまに至るも息巻く人もいる。

地方政府から追放宣言を言い渡され,また周辺村落から襲撃を受けたラミは,トゴヴェレ村から引き下がらざるを得なくなった。ラミ集団の人々は,あらたな生活の場所を探求し始める。候補地として考えられた場所は,すでにこれまでの商業活動の過程で簡易売り場を設置していたラキラキ (Rakiraki),タヴア,バ,ラウトカ,ナヴア (Navua) などのヴィティレヴ島西部の諸都市が検討されたうえで,バに決定された [Naivolasiga 1970]。

いったんバを居住地とすることが決定されると,ラミの人々はナヴア及びナンロガの各地にあった生活場所をいったん畳み,バ地方市場の近くにあるヴァランドリ (Varadoli) に借家を求め,そこでの生活を始めた。このバへの移動の時点でラミは多くの脱落者を生み出し,最大時1000人ほどいたとされるメンバーは300～400人あたりまで減少した。その後,1964年あたりに同じくバ地方の川を挟んで市場の向かいに位置するヤラレヴ (Yalalevu) へと居住地を移動させた。現在に至るもバで一時期の勢いはなくしながらも細々とした活動を続けている [ibid.]。

5 最後に——生活改善の困難そして恐怖としての共産主義

本稿ではフィジーにおいて,おそらく最初で最後の共産主義騒動を巻き起こした協同組合ブラ・タレが,活動を開始した1960年代当時どのように扱われたかを記述,考察してきた。出身村から追放されるに至ったブラ・タレのこうむった災難を瞥見してみてわかるのは,伝統のラディカルな改変が地域社会に受け入れられることの困難と共産主義というイメージに対する政府と周辺社会の極端な忌避である。

周辺地域社会に忌避された理由は,ブラ・タレの実践,ことに「伝統」を改変していこうとする方向性にあったと思われる。彼らが行った様々な実践のなかでも,婚姻,葬儀といった諸慣習の簡略化,廃止とは,具体的には近隣社会との相互の贈与交換の停止を意味した。そのため,歴史的に親族やモノの交換のネットワークでつながれていた近隣社会にとって,ブラ・タレの行動は日常的な関係を断絶するに等しかったといえる。また,ラマタウ自身の釈明にもかかわらず,安息日にまで労働するという行為は,宗教が依然強い影響力を保持するフィジーにおいて反宗教的活動として受け取られるに充分であった。

一方,政府側がブラ・タレに示したスタンスは理解しやすい。当時のフィジー人は,間接統

治枠内の諸規則で縛られた生活をしていた。この規則は，序説で触れたようにフィジー東部の「伝統的」社会制度をモデルとして形成されていた。そのため，ブラ・タレの自主的な教育活動や税金の未納という行為は，単純な法的違反という以上に，政府側にフィジー東部社会に対するフィジー西部の側の反発ともとられかねなかったのだ。また実際に，後にラマタウが形成に参加した党は，西部フィジーへの思いを込めた西部民主党であったことを考慮すると，ブラ・タレの活動が反フィジー東部的な側面を惹起すると読み込むことはあながち的はずれではないであろう。

また，ブラ・タレの活動していた時期，フィジーという地政学的な場所も，ブラ・タレがたどった運命に決定的な意味をもっていたと思われる。つまり，当時はオセアニアに限らず第二次大戦後ファシズムに対する恐怖感が薄れていくなか，「もし貧しい国々が貧困から救い出されないのであれば，こうした国が共産主義へとなだれ込む」という「共産主義に対する恐怖心」[Escobar 1995: 34]が，覇権国家のなかに存在していた時期であった。フィジーにおいても，1963年の総選挙から自治政府の確立さらに憲法制定と，独立へ向けた国家の土台が固められていく政治的要の時期に当たっていた。さらにフィジーには大英帝国のオセアニア島嶼地域における政治的拠点の一つであった。

ラマタウは共産主義という言葉を，おそらく，各種メディアや盟友の労働組合指導者ムハンマド・トラなどから耳にして借用したと思われる。しかし，この言葉はかかるイデオロギー的に不安定な時期に，南太平洋島嶼国内での大英帝国の政治的要地で発せられるには，政治的含意があまりに強すぎたのである。

しかし，よりよき生活を成し遂げるためには伝統の改変が必要であるという意見自体は何も突飛な見解ではない。現代でも平均的なフィジー人からよく耳にする言葉である。そうである以上，ブラ・タレの起こした騒動というのは，「彼ら」だけの問題ではなく，現代のフィジーへと連なる問題でもあるのだ。

注

（1） 後述するラミ時代については，やはり少ないもののヤング［Young 1992］の研究がある。また，春日［春日 2001：339-340］にも言及されている。

（2） なお本稿ではラマタウをブラ・タレの指導者として記述しているが，実際の指導者はキチョーネ・トクラ（Kitione Tokula）で，ラマタウはむしろスポークスマン的な役割であった。しかしトクラがメディアや外部社会との交渉から完全に身を引いていたため，若干名を除きトクラの存在を知る者はいなかった。そのため多くの報道，研究でラマタウが指導者とされてきた。キチョーネ・トクラに言及している研究にはナイヴォラシガ［Naivolasiga 1970］，ヤング［Young 1992］がある。

（3） タンブアとは鯨の歯でできた交換材。

（4） カヴァとはフィジー語でヤンゴナ（Yaqona）と呼ばれる胡椒科の植物の根から作られた飲み物。

（5） ブラ・タレの活動内容の詳細については別稿を準備中である。

（6） ブラ・タレに関する情報は，2002年に行われたフィジー，ナンロガ・ナヴォサ地方及びバ地方

で行われたフィールド調査に基づくものである。その後，探し当てた新聞資料も活用されている。論中では煩瑣になることを避け，略号で新聞等々の出所を示すことにした。*The Fiji Times* は FT，*Vakalelewa ni Pasifika* は VP そして，*Pacific Islands Monthly* は PIM とした。[FT 5/1/2003] というのはフィジー・タイムズの2003年5月1日付けの記事ということである。

(7) 当時フィジーの行政単位は上からヤサナ (Yasana)，ティキナ (Tikina)，コロ (Koro) の順に階層化されており，各担当役人はそれぞれロコ (Roko) あるいはロコ・トゥイ (Roko Tui)，ブリ (Buli)，村役 (Turaga ni koro) と呼称されていた [Roth 1973: 144]。

(8) なお，ラマタウは社会主義を，やはり素朴かつ不明瞭に，次のように定義している。「社会主義：個人的自由は共同体の利益に完全に従属されるべきであるとの原理，正しくあるいは誤ってそこから引き出されるであろうあらゆる演繹によって，競合的生産の代わりとしての協同組合，土地と資本の国家による所有，生産物の国による配分，無償の教育と子供の養育，相続の廃止，日常生活のなかにキリスト教的教えを当てはめる試み」[FT 9/2/1961]。

(9) この文章の原文は次のようである。*"Na inaki ni cavu yava oqo me sereki na tamata mai na icolacola ni vuravura makawa. E sega ni vinakata me vukei ena ilavo se iyau kei vuravura. Na yalo wale ga. ME DA DUA VATA ENA VEILOMANI."* [VP 8/31/1961] ここに大文字で書かれている台詞は，私が調査中，ラミを脱退したメンバーからさえも，世のあるべき形として，しきりに耳にした言葉である。

(10) たとえば私見の及ぶ範囲だと，ダクの他にも西部フィジーを中心にフィジー全土で展開したアポロシ・ナワイのヴィティ・カンバニ運動は著名である。その他にも，ラ地方のナテワ・ベイ (Natewa Bay) での運動やタイレヴ，ザウタタ (Cautata) での活動などが知られている [Spate 1959: 78]。さらに，ナンディ高地のヴナモリ (Vunamoli) にはケレケレタンブア (Kelekeletabua) という文字通りカーゴカルト的な運動が存在したし，同じくラ地方及びブア (Bua) 地方にもサイルシ・ナンボギンボギ (Sairusi Nabogibogi) による救世主の会 (*Soqosoqo ni Mesaia*) という運動があった。

(11) 別の情報ではトゴヴェレ，エムリ，カンビシの3村落が訪問されたとされている [VP 9/14/1961]。ヴァガンラが他の3村から大きく離れていること，同村の交通の便の悪さを考えるとこちらの方がもっともらしい。

(12) 4人とは，西部の長官ヒル (J. A. C. Hill)，地域役人ヒュース (C. A. A. Hughs)，ロコ・トゥイ・ナンロガという政府の役職を担い，彼自身ナンロガ・ナヴォサ地方の大首長の家系にも属していたラトゥ・ワケサ・ヴォサイラギ (Ratu Wakesa Vosailagi)，及びラトゥ・モセセ・ヴァラシケテ・トゥイサワウ (Ratu Mosese Varasikete Tuisawau) であった [FT 9/8/1961]。

(13) ロコについては註の(7)を参照のこと。

(14) 実質的リーダー，キチョーネ・トクラの息子の名前がラミであり，そこからとられたという者もいる。

(15) 本稿では，引用箇所の表記に従いマレリリリ・ラインベ (Malelilili Raibe) と記した。文脈からラル [Lal 1992: 194] に登場するマレレイ・ラインベ (Malelei Raibe) と同人物の可能性も考えられるが，両人物の関係を判断する材料を現時点で筆者は持ち合わせていない。

謝辞

草稿に目を通していただいた大塚和夫教授（東京都立大学），斎藤剛氏（東京都立大学），大川真由子氏（東京都立大学）に記して感謝いたします。なお，本論の作成に当たり2000年度及び2001年度大和銀行アジア・オセアニア財団の資金援助を得ました。

参 考 文 献

Belshaw, C., 1964, *Under the Ivi Tree: Society and Economic Growth in Rural Fiji.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Burns, Sir Alan, 1963, *Fiji.* London: Her Majesty's Stationery Office.

Chappele, A. J., 1975, "The Fijian Voice in Fiji's Colonial History." *The Journal of Pacific Studies*

1: 47-62.

Couper, A. D., 1968, "Protest Movements and Proto-cooperatives in the Pacific Islands." *The Journal of the Polynesian Society* 77 (3): 263-274.

Durutalo, Simione, 1985, *Internal Colonialism and Unequal Regional Development: The Case of Western Viti Levu.* MA thesis, University of the South Pacific.

Firth, R., 1964, *Essay on Social Organization and Values.* London: The Athlone Press.

Freeman, Susan, 1986, "The Centre-poled Houses of Western Vitilevu." *Domodomo* 4 (1): 2-19.

Howard, Michael, 1991, *Fiji: Race and Politics in an Island State.* Vancouver: University of British Columbia Press.

Knapman, B., 1975, *Economic Change and Orgnisational Innovation: The Example of Mavana Village and Tota Cooperative Plantation, Vanua Balavu, Fiji.* M. A. Thesis, Flinders University of South Australia.

Lal, Brij, 1992, *Broken Waves: A History of the Fiji Islands in the Twentieth Century.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Lasaqa, Isireli, 1984, *The Fijian People: Before and After Independence, 1959-1979.* Canberra: Australian National University Press.

Macnaught, Timothy, 1979, "Apolosi R. Nawai: The Man from Ra." In Scarr (ed.) *More Pacific Islands Portraits.* 173-192. Canberra: Australian National University Press.

_____, 1977 *The Fijian Colonial Experience: A Study of the Neotraditional Order under British Rule Prior to World War II.* Pacific Islands Monograph Series no. 7. Canberra: Australian National University.

Mara, Ratu Kamisese, 1997, *The Pacific Way: A Memoir.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Meller, N. and James Anthony, 1968, *Fiji Goes to the Polls: The Crucial Legislative Council Elections of 1963.* Honolulu: East-West Center Press.

Nand, Shardha, 1969, "The Co-operative Movement in Fiji." *South Pacific Bulletin,* second quarter; 41-44.

Naivolasiga, Eparama, 1970, *Evangelization.* Bachelor of Divinity Thesis: Pacific Theological College.

Nayacakalou, R., 1975, *Leadership in Fiji.* Melbourne: Oxford University Press.

_____, 1978, *Tradition and Change in the Fijian Village.* Suva: Institute Paficic Studies.

Qalo, Ropate, 1997, *Small Business; A Study of a Fijian Family.* Mucunabitu Education Trust.

Roth, G. K., 1973, *Fijian Way of Life.* Second Edition. Melbourne: Oxford University Press.

Scarr, Deryck, 1980, *Ratu Sukuna: Soldier, Statesman, Man of Two Worlds.* London: Macmillan Education.

Spate, O. H. K., 1959, *The Fijian People: Economic Problems and Prospects.* Council Paper no. 13. Suva: Government of Fiji.

_____, 1991, *On the Margin of History: From the Punjab to Fiji.* Canberra: National Centre for Development Studies, Australian National University.

Sutherland, Alan, 1983, *Structure of Co-operative in Fiji.* Final report of New Zealand Ministry of Foreign Affairs

Sutherland, William, 1992, *Beyond the Politics of Race: An Alternative History of Fiji to 1992.* Political and Social Change Monograph 15, Australian National University

Thomas, Nicholas, 1997, *In Oceania: Visions, Artifacts, Histories.* Durham and London: Duke University Press.

Thomson, Peter (ed), 1994, *Fiji in the Forties and Fifties.* Auckland: Thomson Pacific.

Watters, R.F., 1969, *Koro: Economic Development and Social Change in Fiji.* London: Oxford University Press.

Worsley, Peter, 1968, *The Trumpet Shall Sound: A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia.* New York:

Schocken Book.
Young, John, 1992, "Social Protest and Spontaneous Development: A Contemporary Social Movement in Fiji." *Pacific Studies* 15(3): 77-114.
春日直樹, 2001,『太平洋のラスプーチン——ヴィチ・カンバニ運動の歴史人類学』世界思想社

(にわ・のりお：〒214-0008 川崎市多摩区菅北浦4-14-3-403)